図書館長の

おもちゃ箱 6

“近代化”する四条通り ―明治、大正、昭和―

樋口 穣



［写真1］京都四條通り

冒頭の写真絵葉書は四条通りを写したものです。では、四条通りの何処を写したものか、わかりますか［写真１］。

東向きに撮影しているので、向かって左側が北の方角。遠く背景には東山連峰の一部がやや霞んで見えています。北側の店の軒にはいずれも同じデザインのガス灯が見えるのに対し、南側には当時なかなか利用者が伸び悩んでいた電灯の利用が確認できます。ガス灯の店の一番手前は「手縫い保険附たび」も扱う洋服の店、一方、電灯の店は看板を見ると「舶来雑貨」を扱う店のようです。見れば見るほど興味が尽きない写真です。

宛名面に貼られた切手には明治43年２月5日附、麹町郵便局の消印があり、翌日にTOKIOからバンクーバー経由で米国マサチュセッツ州メルローズの宛先に発送されています。

これにより、この絵葉書の写真が撮影されたのは明治43年（1910）以前であることがわかるのです。

道幅は、現在の四条通りからは想像できない狭さです。四条通りの拡幅工事については、web版の「図書館長のおもちゃ箱　四条通り今昔（第２回）祇園石段下」でも触れましたが、京都市電の広軌複線路線、四条大宮―祇園石段下間の延伸とともに西から東へと進められました。工事の完成は大正元年（1912）。つまり、ここに見えている四条通りは、道路拡幅前の光景なのです。

通りは、少し先で急に道幅が狭まったように見えます。そこに、道路を塞ぐかのように立っている建物があります。

一見すると一つの建築物のようですが、実は二つの建物が前後に重なって見えているのです（［写真２］部分拡大）。

手前の長方形の壁のように見えるものは、この附近の地名の由来となった、祇園社御旅所の檜皮葺きの屋根。そう、ここは四条御旅町なのです。



［写真2］部分拡大

その向こうの望楼を乗せたような建物は、藤井大丸呉服店。

京都に住んでいる人なら、あれ？と思うかも知れません。藤井大丸も御旅所も四条通りの南側にあるはずだからです。

実は明治末まで、両者はともに、通りの北側に軒を並べていたのです。御旅所の正面は西向きだったこともこの写真からわかります。神社の位置が東の八坂神社にあることを思えば、ほんらいはこの向きで建っているべきものなのです。

望楼のような藤井大丸呉服店は、明治28年（1895）、日清戦争勝利に沸く年に建てられました。この年は、京都にとっては平安遷都1100年を記念する内国勧業博覧会開催の年でした。岡崎にはその目玉となる平安神宮の社殿も完成を見、大勢の観光客が見込まれる年でもあったのです。内国勧業博覧会の開催期間は４月１日から７月31日まで。また、博覧会場への観光客利用を見込んで、京都駅と会場とを連絡する日本発の路面電車営業路線が、京都電氣鉄道によって開通します。藤井大丸呉服店店舗の完成はその年の11月でした。

お寺の塔を除けば当時京都唯一の木造４階建て高層建築、間口八間の堂々たるもので、屋根は輝きも眩しい銅板葺きで

した。ひときわ目立つその姿は“四条アカガネ御殿”と呼ばれ、それを見るために京都に来る人も大勢いたと言います。ところが16年後、明治44年（1911）の京都市会で、河原町通りと四条通りの拡幅が可決されました。通りの北側はそのために、拡幅分の地所が削られるか、立ち退きを迫られることになりました。そこで藤井大丸呉服店はいち早く南側への移転を決め、寺町四条の現在の位置に洋風鉄骨煉瓦造り三階建ての新店舗をえることになります。その際、アカガネ御殿も新店舗西に移築されたのです。ほぼ同時期に移転した御旅所は、現在の位置に新京極通りに向かって建てられることになりました。地所の関係で正面は北向きになり、間口や奥行き、全体の規模も小さくなってしまいました。



［写真3］京都四條通御旅町

［写真3］には京都市の市章のあしらわれた三大事業竣工紀念のスタンプが捺されています。市電開通間なしの頃に撮影されたものでしょう。四条通りを西向きに撮影したものです。市電の後を追うように走る三輪自転車には、洋装の男性が小型の洋犬を連れて乗っているようです。その右の荷車には駕籠のようなものが３つほど積まれています。野菜を売った帰りでしょうか。軌道敷きの中央に見える小窓付きの白い直方体の物体は、今のところ正体不明です。斜めに傾いた日除けの屋根のようなものも見えます。その白箱が凭りかかっているように見える架線柱には「停留場」という表示が確認できます。よく見ると線路の切り替えポイントもあるように見えますから、あるいは転轍機があったのかも知れません。目を凝らすと、白い箱の左裾あたりに、転轍機のレバー基部が見えているようにも思えてしまうのです。

時刻は南中頃。影は短く人々の出で立ちも初夏を感じさせます。家並みはいずれも低く軒を連ね、今よりもずっと広い空から眩しいほどの日差しが照りつけています。

ところで、南側に移転したはずの藤井大丸は何処にあるのでしょうか。

どうやら南側（画面）左側に視認できる電柱奥から3本目の蔭にチラッと見えているようです。5本目のやや細い電柱の向こうには家邊時計店四条店の時計塔も確認できます。

［写真４］は、グランドオープン直前（?）の藤井大丸新店舗の姿を伝えるものです。左手前の御旅所もまだ、工事が未完了のようです。市電屋根の左には移築したアカガネ御殿の軒先がちょっと顔を出しています。

向かって右側（新京極入口西側）で建築中の２階屋は交番で、昭和の終わり近くに建て替えられましたが、現在も同じ位置にあります。それにしても、四条通りのなんと広く感じられることでしょうか。歩行者も好きなところを歩いていますし、都市の近代化を示すアイテムとして、後には必ずファインダーに捉えられる自動車もまだ全く見えません。人の駆け足程度の速さで進行する市電も長閑に見えます。

さて、昭和10年代になると、私のような世代（1950年代生まれ）の記憶にも辛うじて遺る四条通りの姿ができあがってきます。



［写真4］京都四條御旅町



［写真5］（大京都）繁華雑踏を極むる中樞地域四條御旅町

［写真5］は上と同じ場所を撮影したものです。藤井大丸は「フランス風」の鉄筋４階建てに改築されています（写真中央奥）。実は、昭和９年（1934）５月５日に増築工事中に出火し、煉瓦造りの建物を全焼してしまったのです。その後、周囲の土地を買い増しし、再起を図って建てられたのがこの建物で、火事の翌年に竣工しました（４月1日開店）。

通りには次第に4階建ての鉄筋造の店舗も増え、南側には市バスも走り、北側には客待ちのタクシーも並んでいます。道路は完全に舗装され、自転車もずいぶん増えています。

昭和44年（1969）に現在の地下2階地上8階建ての建物に改築されるまで、この建築は寺町四条のシンボルでした。

まだまだ語り尽くせないことは多いのですが、すでに紙数も尽きました。今回はここまでといたしましょう。

※本館所蔵関連図書

荒金義喜『花の百年/藤井大丸百年史』藤井大丸、1970

ひぐち　じょう（教授・日本文化史）

図書館ホームページにも関連情報が掲載されています。ご参照下さい。